



ボランティア

Volunteer

Vol.140



ボランティア 第140号

発行 2026年3月25日
発行所 社会福祉法人イエス団賀川記念館
発行者 馬場一郎

社会福祉法人イエス団賀川記念館
〒651-0076 神戸市中央区吾妻通5-2-20
Tel 078-221-3627 Fax 078-221-0810
E-mail kagawakinenkan@jesusband.jp
HP <http://core100.net>

賛助会費・寄附金のお願い

賀川記念館の事業は皆様によって支えられています。

賛助会費・寄附金を下さった方には寄附控除制度が適用されます。

賛助会費

寄附金

【個人】 一口 1,000円より
【団体】 一口 10,000円より

何円からでも可能

振込先

【ゆうちょ銀行】口座番号：01140-8-3721 社会福祉法人イエス団賀川記念館

賀川記念館は以下の事業を行っています。

- ① 地域福祉事業（天国屋カフェ／外国にルーツをもつ子どもの学習支援教室ははず）
- ② 福祉教育事業（ミュージアム／総合研究所）
- ③ 多機能型児童発達支援賀川記念館くじらぐも

中村光夫さんインタビュー

今号は中村光夫さんのインタビュー記事を掲載いたします。この度、中村さんご夫婦は、賀川記念館に多大なご寄附をくださいました。このご寄附をもとに「地域福祉活動振興積立金(仮名)」を作る計画を進めています。賀川豊彦の理念を継承し、いただいた寄附金を積立金として管理・運用し、その収益をもって法人の理念に基づく事業活動に活用することを目的としたものです。

インタビューでは賀川豊彦との出会いや、思い出なども語っていただきました。

◆賀川記念館とのつながり

賀川先生との関係の先に神戸の賀川記念館とのつながりがあるんですね。一〇年ほど前、松沢教会の会員だった画家の佐竹徳(さたけ とく)さんの娘さんから、「瀬戸内市に美術館ができる」と連絡

をもらって、家内と二人で行ったんです。その時に「せっかくここまで来たんだから、神戸にある賀川先生の施設を訪ねよう」ということになって。それがきっかけで、賀川記念館との繋がりができました。

学生時代からお世話になった賀川先生の関連施設ですから、何か最後に恩返しというか、協力できることはないかと思って、二人で賛助会員になりました。

◆賀川先生とのつながり

私はね、神学校時代の六年間はずっと松沢教会(日本基督教団松沢教会)にお世話になったんですよ。松沢教会は賀川先生が設立した教会で、世田谷の上北沢にある教会でした。私は三鷹の神学校にいましたけども、神学校に通っていた時はそこにずっと通ってました。卒業までお世話になりました。

私の出身は北海道です。野幌(のっぽろ)というところに農業機能高校(現在のとのわの森三愛高等学校)があつて、そこに入学しました。昭和三〇年頃、野幌の教会でいわゆる「賀川伝道」がありました。賀川豊彦先生が来られて講演をされたんです。その講演会の後に、先生と直接対面しました。その時に、私が「神学校に行きたいと思っていて」ということを伝えたら、先生が「それじゃあ、君、東京に来たら私を訪ねなさい」と言葉をかけてくださった。高校二年の時だったと思います。その言葉が、ずっと僕の頭の中に残ってました。

高校を卒業して、一度は実家の農家を一年手伝ったんですが、翌年、親戚一同をなんとか説得してね。もう「絶対に帰らない」というつもりで、丸裸で東京神学大学を受験しました。でも、身元保証人もないし、食べていく当てもない。その時に、松沢教会の賀川先生のことを思い出して、先生を頼りに訪ねていったんです。

◆学費の援助

神学校に入って一年後のことです。松沢教会の会員で懇意にしてくれていた方が、黒澤西蔵(くろさわ とりぞう)酪農学園大学創設者)さんの義娘さんでね。まだまだけれども。私のことを心配してくださった。「義父の黒澤西蔵に会いに行きなさい」と言われたんです。黒澤さんは当時、日本雪印乳業の社長をされていました。僕は若者でしたから、社長室に下駄履きで「こういう者です」と入っていきましてね。黒澤社長は「学費も何もないんだな。それじゃあ一年目は私が学費を出しましょう」と言ってくれました。毎月、雪印乳業の社長室まで学費をもらいに行っていました。

すると大学二年目の時に、今度は賀川先生が礼拝の後に「君、どうやって生活してるんだ？」と声をかけてくださった。「今は黒澤さんから学費をいただいています。来年からは何もありません」と話したら、「そうか、それじゃあ僕がお世話してあげよう」と。アメリカ

カのARTトゥーセイカーさんという方を紹介してくださって、それから大学院を卒業するまでの六年間、毎年学費を仕送っていただいたんです。本当にありがたいことです。

◆学生時代の思い出

夏休みには大学の寮を出なければならなかったので、松沢教会の空いている部屋に置いてもらいました。賀川先生の自宅で食事を食べさせてもらいました。先生が本所の伝道所（現在の東駒形教会など）に行く時には「中村くん、一緒に来よう」と誘ってくださいませんか。

今でも記憶に残っているのは、新宿の西口で降りた時のことです。今のような立派な所じゃなく、飲み屋が並ぶ裏ぶれた感じでした。そこで先生が「お腹空いたな、うどん食べるか」と言って、二人でうどん屋に入ってね。あのうどんを食べたことは一生忘れません。いよいよ大学院を修了して北海道へ帰るといいう時、賀川先生はす

でに病床に伏しておられました。面会謝絶でしたが、奥様に「北海道に帰ります」と挨拶に行ったら、「会っていきなさい」と寝室のあも二階へ通してくださいました。私が「ありがとうございます」と言うとうと、先生は手を差し伸べてくれて。声はほとんど出ませんでした。が、ぎゅつと握手をしてくれました。それがお会いする最後になりました。

◆不思議なつながり

不思議な縁というか、後で分かったんですが、家内の叔父である小川清澄（おがわ・きよずみ）は、松沢教会の初代牧師だったんです。彼はアメリカで賀川先生の通訳やタイプ打ちをして献身的に支えられた協力者でした。そんな繋がりがあるとは、結婚する当時は全く知らなかったもので、後で本当にびっくりしました。

今回、亡くなった妹から引き継いだ江東区深川の土地を売却したんです。わずか八坪ほどの土地でしたが予想を超える額になりました

て。家内とも相談して、このお金は、賀川先生の働きを受け継いでいる神戸の賀川記念館に寄附しようとして決めました。

松沢にも記念館はありますが、あちらは資料や研究が主です。私はやはり、現代において賀川先生の意志を具現化し、社会と関わっていく「実践」の場こそが大事だと思ひ、神戸の賀川記念館を選ばせてもらいました。私たちももうすぐ一〇〇歳

（光夫さん九一歳、知子さん九六歳）ですが、この寄附が先生の後継の働きに少しでも役立てば、これほど嬉しいことはありません。



（聞き手 小野歩）
*聞き手の賀川記念館職員 小野歩も北海道出身で、中村さんが名寄教会牧師としてお働きの際に大変お世話になりました。実は中村さんは小野の洗礼式執行者です。不思議なつながりを感じます。

左 知子さん
右 光夫さん （ご自宅にて）

隣保事業

天国屋カフェ一五周年記念ツアー報告



●フィリピン・コーヒーの里を訪ねて

一、プロジェクトの背景：日本からフィリピンへ繋がる想い
天国屋カフェは二〇一〇年の開設以来、フィリピン・ベンゲット州トゥブライ産のコーヒーを大切に提供し続けてきました。この一

五周年という節目に、日々私たちが抽出しているコーヒーの背景にある物語を深く知るため、「コーヒーが届くまで」と題したプロジェクトを始動しました。

その第一歩として、二〇二五年八月、賀川記念館にて事前学習セミナーを開催しました。講師にお迎えしたのは、私たちが長年豆を仕入れている生産者でもあり、現地の環境NGO「コーデイラエラ・グリーン・ネットワーク(CGN)」の元代表でもある、レナート・ギリガン(通称レネ)さんです。彼は代々続くコーヒー農家に生まれ、大学で森林学を学んだ後、日本の「アジア学院」での研修経験も持つ、日本とフィリピンの架け橋のような存在です

(現在は日本在住)。この学びを深めるべく、二〇二六年一月二十六日から三十一日にかけて、レネさんの故郷を訪ねる現地研修旅行を実施しました。参加者はカフェのスタッフや関係者を含む四名でした。

二、生産地の現状と行政への短い訪問

研修二日目、私たちはトゥブライ市役所を訪れ、農業、弁護士、副市長を経て就任したという経歴を持つ現職市長を表敬訪問しました。市長との面会は短いものですが、その後の農業事務所での懇談では、生産地の厳しい現状を学びました。数ヶ月で現金収入になるキャベツやブロッコリーなどの野菜栽培へ転向する農家が増える中、収穫が年に一度のコーヒーを維持することの難しさや、品質管理の課題により

豆が安価に買い叩かれている実態を伺いました。

三、祈りと忍耐の手仕事：農園での過酷な実地体験

二八日からは、レネさんの姉であるジーナさんが営む「ロスオック」農園での体験が始まりました。ここで私たちは、一杯のコーヒーがいかに気の遠くなるような手作業に支えられているか、身をもって知ることになりました。

まずは、足場の悪い斜面での収穫です。コーヒーの木は厳しい起伏の中であり、そこを何度も上り下りしながら、真っ赤に熟した「チ



↑コーヒー豆の選別中

エリー」だけを慎重に選んで摘み取ります。少しでも緑の実が混じると品質が落ちるため、一粒ずつ確認しながらの作業は、集中力と体力を激しく消耗する重労働でした。

翌日の加工工程は、さらに過酷さを極めました。乾燥させた豆を「ハルオ」という重い木製の杵で突く脱殻作業（バヨ）を、二〇分から三〇分も繰り返します。農家の方々は「ズドン」と重い音を立ててリズムカルにこなしますが、私たちがやると無駄な力が入ってしまい、腕や腰がすぐに悲鳴を上げました。

その後、ザルを巧みに操り、殻を飛ばす「タヒップ」を行い、さらに虫食いや未成熟な豆を一つずつ指先で取り除く選別（これも手作業！）へと続きます。最後に、ようやく手に入れた豆を鍋で焙煎し、鉄の棒で叩き潰して粉碎します。これらすべての工程を自ら体験して初めて、私たちが普段何気なく口しているコーヒーの一粒が、農家の皆様の並々な努力と忍

耐によって生み出されていることを痛感し、一粒一粒が愛おしく感じられました。

四、伝統の息遣いと、未来へのやさやかな願い

ツアーの中、伝統料理「ピクピカン」をいただく機会がありました。これは鶏を叩いて調理する山岳民族の儀式的な料理（特別に許可されている）であり、彼らの文化や伝統に触れた瞬間でした。現地ではコーヒーを薄く煮出してお茶のように楽しんでいます

ますが、日本の抽出方法との違いを知ること、お互いの文化を理解する上で非常に新鮮な驚きでした。

ジーナさんからは宿題ももらいました。トゥブライコーヒーの流通をより良くするためには、多くの課題があることも分かりました。

今後は、生産者の声に耳を傾けながら、「トゥブライ・コーヒー」を使い続けられ

たらいいなと思っています。一粒一粒の豆に込められた物語を大切にしながら、美味しいコーヒーを通じて、フィリピンの生産者と日本の消費者を繋ぐ、やさやかな架け橋になれば——。そんな願いを込めつつ、この貴重な経験をこれからの活動に活かしてまいりたいと思います。温かく迎えてくださったジーナさん、そしてトゥブライの皆様に、心より感謝申し上げます。



↑帰国後にレネさん（左から3番目）と共に

ボランティア募集のご案内

当館の活動は皆様のご支援により成り立っております。賛助会費や寄附金によるご支援はもとより、多くのボランティアにお助けいただいております。感謝申し上げます。

現在、「天国屋カフェの運営スタッフ」「賀川記念館ははずでの学習支援」に関わってくださるボランティアを募集しております。お気軽にお問い合わせください。賀川記念館の活動に加わってください。今後ともよろしくお願いいたします。

●外国にルーツをもつ子ども
の学習支援 はいず

◆進学のハナシ

「はいず」は基本的には、小学生を中心としたクラスです。しかし、中には「もっと勉強をしたい」という思いを持ち「はいず」に通う中学生、高校生がいます。

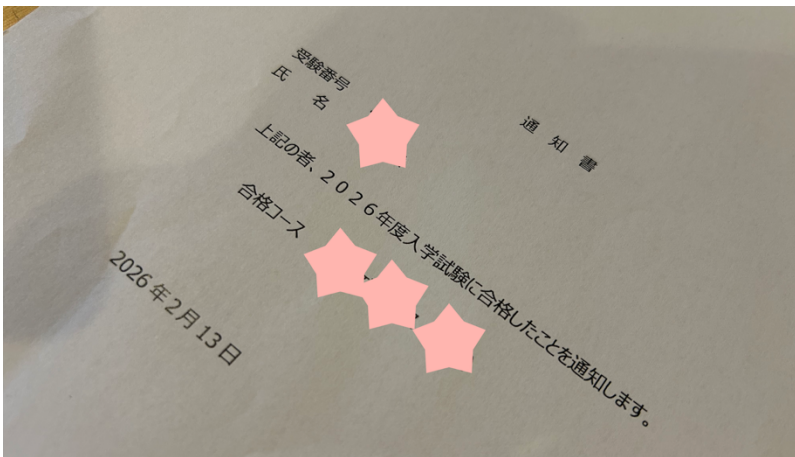
二〇二五年度は二人の中学生が「はいず」に通ってきていました。この度、二人の進路が決定しましたので、ご報告いたします。一人は、私立高校に進学、もう一人はルーツの国の高校に進学します。

*勉強熱心で頑張り屋なTさん
Tさんは中学生になって中学生で「はいず」に通い始めました。いつも頑張り屋で、じっくりと勉強に向き合っています。

進路を決める際、「外国人特別枠」(※)が利用できるかと分かった時、大人たちが頭を悩ませました。でも自分で情報を集め、志望校を決めてきました。自分の得意なこ

とを見つけ、進路の先までしっかり考えていました。合格証を見せてくれた時にはすごく誇らしげな顔でした。

*好きなことに一生懸命なMさん
自分のルーツの高校に進学することを決めてきた時、大人たちは正直驚きました。でも、「自分のル



ーツにある宗教や文化のことをもっと知りたい」と教えてくれた時、心が温かくなりました。日本からは離れるけれど、自分のやりたいことを一生懸命に頑張ってるね。

今回の進学が他の子どもたちのロールモデルになってもらえたら嬉しいです！応援しています。またいつでも遊びにきてね。

(※)「外国人生徒にかかわる特別
枠選抜」

外国人特別枠は、日本の公立高校入試で、外国にルーツを持つ生徒が不利になりやすい状況を補うために設けられた特別な入学枠・配慮制度のことです。兵庫県では、来日後三年以内など一定の条件化で、問題用紙にルビを振るなどの配慮が施された入試を受けることができます。県下六校に三枠ずつ設けられています。特別枠は本来「不利を補うための制度」ですが、兵庫県では対象校が少ない

ために、倍率が高く、むしろ一般入試より厳しい条件の学校もある状況です。

<実施日>

毎週 火曜日・金曜日 16:00~18:00

<参加者>

参加人数：31名（小学生24名、中学生2名、高校生1名、保護者：4名）
ルーツ別：中国、アフガニスタン、ネパール、インド、インドネシア
ベトナム

<スタッフ>

職員：1名
ボランティア：40名（内 運営委員：3名）
社会人、大学生、高校生

●多機能型児童発達支援

賀川記念館くじらぐも

二〇二五年度の賀川記念館くじらぐもは、前号『ボランティア』（一三九号）でもお伝えしたように、職員体制の変更をはじめ、様々な取り組みにチャレンジした一年でした。その中で一番大切にしてきたのは「子どもをまんなかにおいて考える」ということでした。一人ひとり特性のある子どもたちですが、とてもユニークな発想を持っていて、その発想をいかに実現していくかということが大切に



なってきました。そして物事を決定する時には、子どもたちの意見も聞きながら、一緒に決めていくプロセスが大切だと考えています。子ども家庭庁が発足して以降「子どもまんなか社会」というキーワードが浸透しつつありますが、言葉だけでなく、私たち大人が実践していくことが肝要ではないでしょうか。

二〇二六年度は二〇二五年度の取り組みをさらに発展させ、子どもたち一人ひとりが参画できるようにしていきたいと思っています。もちろん就学前の幼児さんから高校三年生までと、対象年齢も幅広いので、簡単ではありませんが、それぞれが年齢に合った形で「共に創る」ことを基本的な考えとして歩んでまいります。そして、くじらぐもの中だけに閉じるのではなく、地域に開き、多くの

方々のお力もお借りしながら、地域全体で子どもたちをまんなかにおいて育ていくことができると願っています。

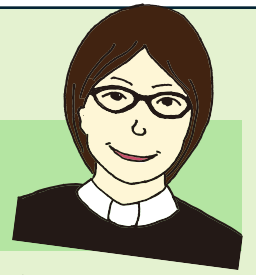


【御礼】神戶やまぶき財団社会福祉助成金

これまでくじらぐもでは子どもたちの学校や自宅への送迎車としてレンタカーを使用してきました。しかしながら費用的な負担や旧式の車であることなどが課題となっていました。この度、神戶やまぶき財団社会福祉助成金（二〇二五年度前期）に採択いただき、新しい車を購入することができました。これまで以上に安心安全そして快適に送迎をすることができ、新しい車に子どもたちも喜んでいきます。ここに神戶やまぶき財団様に心からの御礼を申し上げます。

6

上内鏡子牧師の聖書の話



「しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」

マルコによる福音書 10章 43節～44節

三月は卒業の季節、そして四月は、新入生や新社会人がそれぞれに夢や目標を目指して、希望をもって新しい人生のページを始める季節でもあります。

子どもたちに将来の夢を尋ねると、幼少期は「警察官」や「消防士」などの花形職業が多く、高学年や中学生では、「医師」「看護師」「教員」「エンジニア」などの専門性の高い職業への興味が高まるそうです。(ビデオリサーチ、ベネッセ教育情報など) わたしの知っている小学生も宇宙飛行士になりたいと熱く語ってくれたことがあります。現代の不穏な世界情勢の中でも、子どもたちには、大きな夢に向かって希望溢れる毎日を送ってほしいと願います。

さて、イエスの弟子たちもきつと素晴らしい夢や希望を抱いていただろうと興味深いところですが、その期待とは裏腹に、ゼベダイの子ヤコブとヨハネの兄弟は、イエスが世の王様になることを見込んで、自分たちを左大臣と右大臣にしてほしいと厚かましくも願い出たのです。これでは、イエスを利用して、出世がしたかったという下心が見え見えます。そして、あるうことか、このことを知った他の弟子たちも、抜け駆けされたことに憤慨したのです。イエスがこれまで多くの人々に教え示してきた言葉や行いは、神の御心にかんがって、困窮する者たちや病人たちを救うことだったはずです。

イエスはさぞ落胆したことでしょう。だから、皆を呼び集めて諭されました。その言葉が、今回取り上げた聖句です。立身出世とはほど遠い内容で、神の御心に従うことは、人の上に立つことではないとはっきりと宣言しておられるのです。残念ながら、この時でさえも、弟子たちはイエスの心を全く理解できていませんでした。

イエスはその後、十字架刑に処せられるという苦難の道をたどります。ところが、あれだけ慕っていた弟子たちは誰一人傍に寄り添う者はおらず、消え去ってしまったのです。

とっておき

天国屋カフェのレシピ



ちらし寿司

【材料】(10人分)

米	5合 (炊くときにこぶを1枚入れる)
すし酢	150 cc
ちりめんじゃこ	30 g (すし酢につけておく)
瓶入りシイタケ煮	1本
人参	1本
ごぼう	3分の1本
レンコン	1本 (半本は薄く切って茹で、別のすし酢につける。)

【作り方】

- ① 人参、ごぼう、レンコン半分を小さく切って甘辛に煮る。
- ② 米が炊けたら、寿司桶など水気をすう容器に入れ、すし酢につけたちりめんじゃこを混ぜる。(この時米は切るように混ぜること。)
- ③ うちわで仰ぎながら冷ましてシイタケを混ぜる。
- ④ 煮た野菜(人参、ごぼう、レンコン)を混ぜる。

皆様おなじみの「ちらし寿司」です。春はお祝いが多いですね。たくさん炊いて、みんなで食べると美味しいですね！トッピングは、きざみのり、錦糸卵、酢レンコン、エビ、紅生姜など皆さんのお好みでどうぞ。(い)

【編集後記】

▼中村光夫さん・知子さんご夫妻にお話を伺った。賀川豊彦と寝食を共にし、その背中を間近に見てこられた中村さんの言葉には、時代を超えて心に響く重みがある。▼「現代において、賀川の意志を具現化する『実践』の場こそが大事」は中村さんの言葉だ。この言葉に、賀川から中村さんへ、そして私たちへと繋がるバトンの本質を見た気がする。賀川の意志を仰ぐということは、過去を懐かしむことや賀川の功績を讃えることではなく、今この瞬間に困難を抱える人の傍らに立ち、具体的な一歩を踏み出す「実践を引き継ぐ」ことに他ならない。▼時代が変わり、社会の形が変わっても、私たちがなすべきことは変わらない。それは、先人が切り拓いてきた「実践を引き継ぐ」ことだ。子どもたちの成長を支えること。地域、社会、世界に目を向けること。福祉の現場を走り続けること。その一つひとつが、百年前から続く「実践」の延長であると信じている。▼一四〇号という節目に、改めてこの「実践」の尊さを噛み締めている。先達から受け取ったこのバトンをしっかりと握り直し、これからも一人ひとりの命が輝く社会を目指して、共に歩みを進めていきたい。(お)